

# 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第13回 全国大会プログラム

日時： 2013年11月9日(土) 9:30～18:00  
場所： 甲南大学 岡本キャンパス  
〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本8-9-1  
TEL：078-431-4341  
(JR 摂津本山駅・阪急岡本駅 徒歩10分)

## ★研究発表 (9:30～11:55)

第一室 (5号館521教室)

司会 東京女子大学 原 英 一

1. 'Decent Home' を目指して——ウラニア慈善の視点から (9:30～10:15)

神戸市外国語大学(院) 小 西 千 鶴

2. ヒロインの誕生——*Jane Eyre* の翻案劇をめぐって (10:20～11:05)

京都教育大学 奥 村 真 紀

3. コンラッドとヴィクトリア時代の海——「東洋の海」を中心に (11:10～11:55)

武蔵大学(非) 設 楽 靖 子

第二室 (5号館522教室)

司会 神戸市外国語大学 並 河 葉 子

1. 20世紀女性参政権運動におけるアーツ・アンド・クラフツ運動の影響 (9:30～10:15)

麗澤大学 佐 藤 蘭 香

2. ヴィクトリア期イギリスの年少者移民——徒弟・囚人・里子 (10:20～11:05)

神戸女子大学 森本(吉村)真美

3. 刺繍をとおして世界が広がる——ヴィクトリア時代後期の刺繍と女性 (11:10～11:55)

津田塾大学 成 田 芙 美

★総会 (5号館511教室、13:00～13:40)

司会 福島大学 辻 み どり

★シンポジウム (5号館511教室、13:50～16:40)

ヴィクトリア朝とヴォランティアズム

趣旨説明・司会 下関市立大学 高 田 実

パネリスト 神戸市外国語大学 光 永 雅 明

摂南大学 林 田 敏 子

東京大学 大 石 和 欣

★特別対談 (5号館511教室、16:50～18:00)

司会 日本女子大学 川 端 有 子

歴史と文学の対話——伝記を手がかりにして

京都大学 佐々木 徹 × 甲南大学 井野瀬 久美恵

★懇親会 (18:10～20:00)

会場 学友会館3F バンケットルーム

司会 京都女子大学 武 田 美保子

## 【研究発表】

‘Decent Home’ を目指して——ウラニア慈善の視点から

神戸市外国語大学 (院) 小西 千鶴

作家チャールズ・ディケンズは、資産家であり慈善家としても知られた Angela Burdett-Coutts (1814-1906) と、罪を犯した売春婦たちの更生・自立施設 ウラニア・コテッジ (1847-62) を立ち上げた。二人は、貧困の克服に対する強い義務感を共有していたものの、その生い立ち境遇においては全く異なる。熱心な英国国教会の支持者で特に福音主義を信条にするクーツは規範的な運営を考え、一方のディケンズは自らの貧困体験から彼女たちの視座に立ち実用的な施設づくりを目指した。本発表では、ウラニア・コテッジ設立をめぐるディケンズとクーツの思惑の違いに焦点をあてる。家父長制社会、男性社会と称されるヴィクトリア朝社会にあって、ディケンズは資本を提供するクーツという女性の異なる意見、旧式的な考えに耳を傾けなければならなかった。その遣り取りの積み重ねが、この施設をそれまでに存在しなかった Home としての特質を生み出し、それが後のディケンズ作品の発展にいかにか寄与したのかを論じたい。

ヒロインの誕生——*Jane Eyre* の翻案劇をめぐる

京都教育大学 奥村 真紀

1847年に発表された Charlotte Brontë の小説 *Jane Eyre* は、出版直後からベストセラーとなり、順調に版を重ねた。その人気は、原作を離れたところでも、1848年から現在に至るまで絶えることなく、この作品が、舞台や映画という形で翻案され続けていることから明らかである。本発表では、19世紀に発表された *Jane Eyre* の翻案劇について、それぞれ原作の何がどのように強調されているかを考察し、年代を追って分析することによって、ヴィクトリア朝という時代が、*Jane Eyre* という一つの文学作品をどのような価値観を持って翻案してきたか、そして、その翻案劇がどのように人々に受容されたかを考察してみたい。それによって、文学作品の意味を文字という限られた枠から解放し、広くヴィクトリア朝文化という文脈の中でとらえなおすことを目標とする。

コンラッドとヴィクトリア時代の海——「東洋の海」を中心に

武蔵大学 (非) 設楽 靖子

ジョウゼフ・コンラッド (1857-1924) は、海をモチーフとする作家を挙げれば必ず名前の挙がる英文作家であるが、イギリス商船員として過ごしたのが 1878-94 年であることから、その体験・見聞は、細部にわたってヴィクトリア時代中期以降の「海のイギリス史」を反映するものといえる。航海技術の進歩 (帆船と蒸気船の併存)、通信網の発達などと平行してイギリス帝国が版図を拡大していったこの時期、コンラッドは商船ネットワークの幹線航路のみでなく、僻遠の地を回るローカルな交易船にも乗務の機会を得て、イギリスの「養子」となっていった。本発表は、まずコンラッドが乗務した船・航路の全体像を確認し、彼の作品に多くの題材を提供した「東洋の海」に焦点を当て、19世紀の博物学者 Alfred R. Wallace の旅行記などを用いて、コンラッド自身の体験・見聞とその作品化の特徴を探る。

20世紀女性参政権運動におけるアーツ・アンド・クラフツ運動の影響

麗澤大学 佐藤 繭香

20世紀はじめにイギリス社会を騒がせた女性参政権運動は、19世紀の女性参政権運動にはなかった新たな活動方法を見いだした。ロビー活動だけでなく、行進をはじめとした大衆に対する多様な宣伝活動を行ったのである。そうした新たな宣伝活動においては、視覚的な表象を使用する様々な方法がとられた。しかし、そうした視覚的な表象を使用する活動方法は、19世紀後半に発展したアーツ・アンド・クラフツ運動の伝統や成果に多くを負っていた。本報告では、視覚的な宣伝方法のひとつであるバザーに焦点をあてる。特に戦闘的な組織として有名であった女性社会政治同盟 (WSPU) と 1907年に WSPU から分離した女性自由連盟 (WFL) が主催したバザーでの会場装飾、展示販売品、演劇などの娯楽を分析し、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響を探るとともに、そうした表象によって、どのような女性像を宣伝しようとしたのか明らかにしたい。

## ヴィクトリア期イギリスの年少者移民——徒弟・囚人・里子

神戸女子大学 森本（吉村）真美

貧困層の年少者が家族や血縁者に伴われることなく海外植民地に渡航する／させられる「子ども移民」は、17世紀初頭における北米植民の開始とほぼ時期を同じくしてはじまった、イギリス帝国の伝統的かつ典型的な棄民政策のひとつであった。年少者移民は20世紀中葉まで継続し、カナダや南アフリカ、オーストラリアなどに数多くの子どもたちが官民双方のルートから組織的に移送されたが、制度の枠組みやその活動の意義が大きく変化し、かつ規模としても拡大したのはヴィクトリア期であった。

本報告では、この時代の「子ども移民」を実態として広義にとらえ、教区や政府、民間慈善団体を通じて帝国各地に送られた、「教区徒弟」や「流刑囚」あるいは「里子」として送られた年少者を対象として、かれらを海外に送り出した諸制度の変遷を、この活動に作用したさまざまな社会的・文化的要因を視野に入れつつ検証を試みる。

## 刺繍をとおして世界が広がる——ヴィクトリア時代後期の刺繍と女性

津田塾大学 成田 芙美

ヴィクトリア時代の刺繍といえば、女性が家庭でおこなう趣味と思われがちである。それもひとつの刺繍のあり方だが、本発表では、刺繍をとおして、家庭の外へ活動の場を広げていった女性たちがいたことに注目したい。特に同時代の後期、「芸術刺繍」の流行をきっかけに、刺繍の芸術としての価値が見直されるようになり、ロンドンで王立芸術刺繍学校が設立された。この学校の女性たちは、刺繍を絵画に結びつけることで、芸術として扱おうとした。また他方では、アーツ・アンド・クラフツ運動の盛り上がりのなかで、刺繍を絵画から独立した創作活動としておこなった女性たちもいた。さらに、これらの動きはイングランドを越えて広がった。アイルランドでも王立芸術刺繍学校が設立され、同学校は同地でのアーツ・アンド・クラフツ展覧会にも関わった。こうした動きを追いながら、刺繍をとおして女性たちの世界がどのように広がったのかを示したい。

## 【シンポジウム】

### ヴィクトリア朝とヴォランティアリズム

ヴォランティアな社会としてのヴィクトリア朝——イギリス的自由の歴史的展開

趣旨説明・司会 下関市立大学 高田 実

自由主義とヴォランティアリズム——J. S. ミルを中心に

神戸市外国語大学 光永 雅明

社会秩序とヴォランティアリズム——犯罪訴追協会を中心に

摂南大学 林田 敏子

ヴォランティアリズムとジェンダー——文学と歴史の境域

東京大学 大石 和欣

「ヴォランティアリズム (voluntarism)」は、近代イギリス社会を特徴づける重要な言葉のひとつである。誰かに強制されることなく、自発的意思に基づいて行動し、他者との連帯の中で、良き社会を構築することは、近代的な市民の理想とされた。この規範が世間に充溢し、ヴィクトリア朝の社会に独特の質を刻印することとなった。病院、学校、救貧、秩序維持など、社会生活の多くは国民の自発的な力によって支えられていたのである。

本シンポジウムでは、このヴォランティアリズムがヴィクトリア朝社会においていかに機能したのか、その社会的・歴史的源泉はどこに求められるのか、さらにその歴史的意味をどのように評価すべきか、これらの点を考えてみたい。

まず、今日われわれが「ヴォランティアリズム」と呼ぶものが、当時のイギリスにおける自由主義思想においていかに理解されていたのかを示す。次いで、この社会的な理念が「公的なもの」としても機能していたことを、社会秩序維持の面から検討する。最後に、同時代人はいかなる心性のもとにヴォランティアな行為を行っていたのか、ジェンダー視点も取り入れながら明らかにしたい。

以上の考察から、自由主義の中で「自発的に」社会を構築しようとする力と、それを支える価値観がもつ両義性が明らかにされるであろう。同時に、この歴史的分析は、現代社会の一大争点たる「ヴォランティアリズム」を、長期的な視点から考え直す契機となるであろう。

## 【特別対談】

### 歴史と文学の対話——伝記を手がかりにして

司会 日本女子大学 川端 有子

京都大学 佐々木 徹 × 甲南大学 井野瀬 久美恵

歴史と文学の接点はいろいろあるが、そのひとつが伝記にあることは間違いない。そして、ヴィクトリア朝という時代を考えたとき、まさきに思い浮かぶのはトマス・カーライルの顔である。カーライルは「歴史について」というエッセイのなかで「歴史は多くの伝記から抽出されたエッセンスである」と述べる一方、伝記に関する書き物のなかで「歴史の意味するところは、けっきょく伝記的なものである」と言っている。カーライル自身、歴史も書けば伝記も書いたし、歴史家J・A・フルードによる有名な伝記の対象ともなり、物議を醸した。伝記に見るものは「事実」なのか、それとも「筋のおもしろさ」なのか。

こうしたことを手がかりにしながら、歴史と文学の対話を試みてみたい。

\* 会員以外の方の参加も歓迎いたします(無料、ただし、懇親会に参加される方は懇親会費をお支払い願います)。

### 岡本キャンパス

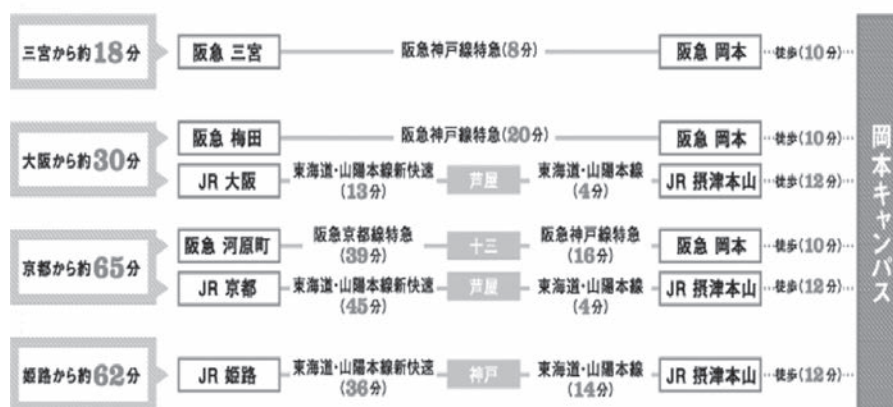
住所 〒658-8501  
兵庫県神戸市東灘区岡本8-9-1

TEL 078-431-4341

JR神戸線摂津本山駅から徒歩12分  
阪急神戸線岡本駅から徒歩10分



※乗り換え時間は含みません



## 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 (The Victorian Studies Society of Japan)

事務局：〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本 8-9-1  
甲南大学文学部 井野瀬久美恵研究室  
Tel: 078-431-4341/Fax: 078-435-2578  
E-mail: victoria@center.konan-u.ac.jp